

明治維新の排仏毀釈について

鈴木孝光

排仏毀釈の起つた原因は、(一)国学の成長、(二)排仏論の影響、(三)僧侶の墮落である。即ち徳川幕府仏教政策の仏教の暗黒面に対する反動として起つたのである。

(一)

国学は、文献による古史古文の研究に出発し、復古主義に立つて古道惟神の大道を力説して、国民精神を興さしめるに寄与する所大であつた。本居宣長^①の古事記伝はその第一に挙げるべきものである。宣長は自由研究と批判の精神とを重視し、偽りない人間の真情こそ尊いと云う考え方を主張したのである。平田篤胤は古道説を神道として体系化し、倫理的な宗教運動としてその宣教に情熱を傾けたのである。

国学復古神道の動きは、単に歴史的思想運動ではなく、我国の歴史的に一大転換をもたらした歴史的思想運動で

あり、近世日本に於ける国家思想の動きとみるべきものであつて、復古思想が尊王倒幕思想と共に拡大しつつあつた時代である。篤胤は神道を、これはすべての人々におのずからそなわつたものであり、五倫五常は生まれながらにして具有されているものである。それをそのままにしてゆくのが神道に随う事であり、上代を「純固なりし惟神の道」の損われなかつた時とし、その為に性の善を説き中庸の首章の語をひいて^②孟子の性善説風の考えをほのめかした。老子の道家思想を神道に結びつける考えも取り入れたのみならず、その他切支丹等の思想も我国の神道と本来の關係をつけ、日本中心の宇宙生成論にまで発展させたのである。

初期国学の国体論は、封建制・封建的思想に対して鋭い批判力をもつたものであるが、庶民と結びついた為、

遂に積極性を持ち得なかつた。しかし国学が篤胤によつて代表される時期に入つて、国体論を中心とする思想運動に転化したのである。篤胤門下で教育された人々には、幕末に於て志士として活躍した者多く、かくて国学は新支配者の勢力内に入り、儒教国体論と融合、明治維新の理論的源泉となつたのである。明治維新に於ける王政復古の思想は、篤胤に於てすでに成熟しつつあつたのである。けれどもかつての批判的な学問の精神は失われて、復古主義は排他的な国粹主義の色彩を強くし、幕末の尊王・攘夷運動と結びついて、^③地方の豪農・郷士層に迎へられていつたのである。

(二)

徳川時代の儒教をはじめ、国学者・洋学者等、仏教排撃的傾向のなかつたものは絶無に近い。排撃の重点は、その思想の出世間性・非倫理性・非科学性・非日本性、或いは現実にそれが封建社会に与える害悪、また封建経済に対する重圧等、必ずしも一定していなかつたようである。なかでも社会に最も多く影響を及ぼしたのは儒者の排仏論である。藤原惺窩・林羅山・山崎闇斎^⑤等、いずれも禅

門より儒教へ転向し、儒学者として独立の立場をとり、やがて排仏論を唱えるに至つた人達である事は興味深いものがある。排仏論は、徳川後期に至つて一般的な社会思潮を形成するにいたつたが、それら排仏論に対して、仏教側からも駁論がなされた^⑥が、学問的・思想的としてはともかく、一般的な社会思潮としては、仏教ははなはだしく不利な立場におかれた。排仏論者の中心は、仏教の出世間性と共に、また僧侶の墮落に向けられたのである。その遠因をたずねると、徳川幕府の「利用しつつ保護する」仏教政策が、仏教本来の精神を害したと云うべきものであり、檀家制度と寺領による寺院僧侶の特権的生活は、一般庶民の反感・非難的となるに及んだ。今その著名な排仏論者として、懷徳堂富永仲基及び国学者復古神道の完成者である平田篤胤について述べてみよう。

懷徳堂と云うのは、幕府の保護・鴻池等富豪の後援により、尼崎に開かれた学問所である。懷徳堂の思想的基調は朱子学であるが、しかし他の場合と異るのは、その批判的・合理主義的学風にあつた。富永仲基の思想的傾向は歴史学的であつて、儒者でありながら儒教を批判し

た爲に破門されたが、その後も所信をまげず「出定後語」を著した^⑦のである。「出定後語」は、仏教經典の歴史的研究の成果を二十五章に盛り、仏教展開の諸相を明らかにしたものである。彼の仏教論は、これまで儒者が仏教理論を批判する時、出世間的・非倫理的であると規定したのに対して、異色ある議論である。また儒者が、感情的に仏教を排せんとしたに對し、科学的・歴史的に仏教を再検討し、且つ仏教の現代的意義を明白にせんとする熱意が窺われる。従来考えられているように彼自身必ずしも排仏論者ではない。ただ彼の研究が排仏論者に利用され、その有力な理論的武器となつた事は事實である。

平田篤胤の排仏論書としては、「出定笑語」があげられる。「出定笑語」の要旨は序文に、

「マヅ第一に天竺ノ国ノ水土風俗ヨリ致シテ、其國ノ始メノ伝説由來、マタ釈迦一代ノアラマシ、又モロモロノ仏教一部一冊トシテ、釈迦ノマコトノ物デナク、残ラズ後人ノ記シタル物ナル憶ナ論弁サテ仏法ガ諸^{モト}越^コヘツタハリ、夫ヨリ御國ヘツタハツタル事ノアラアラ、マタ御國ニアル所ノ諸宗ノ始マリ、及ビソノ宗旨宗旨

ノ立カタ、サテ仏法ノ本意、マタ當時世ニアル者ノ仏法ノ心得方ナドノ事ヲ申スノデ^{イザル}」

と云つてゐる。即ち仏教は世に害惡を及ぼすものであり、又仏は日本の神のように実在のものでなく、一種の寓意にすぎないので、これを信仰した所で利益になるはずはない。仏教はなんら根拠のないものであり、ここに日本の純真なる人情破壊され、貴い神の道は破壊されたと云うのである。その他に「神敵二宗論」「悟道弁語本」等の書物があるが、これら書物に於ける意見は彼の獨創ではなく、先人の意見である。ただこれら諸書によりながら、それを多分に誇張的・神道的に再組織している点が注目される。

(三)

明治維新に於ける排仏毀釈の原因は、王政復古による神道國教主義にあつた事は云うまでもない。しかし、反面仏教自身にも反省せねばならぬ点が多々あつた事は否定出来ない。排仏論の多くが、仏教のこの面を衝いたものが少なくない。思想的にみて、神道儒教の影響に大なるものがあつたが、同時に寺院の有り方自体に対する批

判も加わっていたのである。

徳川時代の仏教の功績面をみると、仏教の庶民浸透化である。檀家制度の強化により、全国的に寺院と民衆との関係が形成され、上流社会のみでなく、農民町人階級にも仏教信仰が普及した。特に浄土宗・真宗・日蓮宗等の民衆教化が顕著であつた。又寺子屋教育の仏教庶民化に及ぼした影響も大きく、⑧ 教育内容は儒仏混合されたもので、封建的教育の特質を発揮したものである。

徳川幕府のたくみな仏教政策により、仏教は封建政治の権力統制と利用のもとにおかれたが、しかし、寺院は社会的地位と生活安定を保障され、檀家制度により寺檀関係固定し、僧侶は教化活動行わずとも、檀家の葬式・仏事供養を営む事によつて僧侶としての身分を保ち、世間の人々より尊崇を得る事が出来たのである。ここに必然的に仏教の沈滞と僧侶の墮落を招来せずにはおかなかつたのである。⑨ 即ち幕府よりの保護、檀家の布施、寺領の収入によつて、多くの僧侶は好き気ままな生活をし、中には女色遊興に耽る僧侶もあつて、⑩ 世間の非難をうける僧侶も少なくなかつたのである。

仏教寺院は世俗的特権を与えられる事により貴族化し、檀家制度・宗門人別改帳⑪の制度は逆に仏教の自由と情熱を抑制し、仏教の形式化及び僧侶の墮落は、民衆との間に離反を生じ、排仏思想をなす原因となつたのである。

(四)

排仏毀釈は仏教に対して、一大痛棒であつた。それは一時的にせよ、広汎且つ徹底的に行われた。そのような排仏毀釈の激しい嵐に対し仏教徒は、無反応・無抵抗であつたわけではなかつた。時流に便乗せんとする僧侶も少なくなかつたが、虚心に仏教の旧弊を反省して、徳川幕府の「利用しつつ保護する」政策下にあつた仏教界の覚醒を促した僧侶もあつた。

排仏毀釈に対する仏教徒の直接的な反撥は、如何に現われたであろうか。排仏毀釈の行過ぎな、至る所に過激な破壊的行為を伴い、民衆の反感を招来したのみでなく、信仰上にも種々の混乱をひきおしたのであるが、そのような情勢は、政府の革新政策そのものに対する批判力や反撥ともなつて現われてきたのである。排仏毀釈運動の進展に伴い、日本の文化を夥しく破壊したのは惜しむ

べきであるが、革新運動としてはやむを得ぬことである。写経仏教や祈禱仏教に対する革新は、教界内から発生したが、読経仏教に対する革新は、国家政治の方面からひきおこされたものと解すれば、この排仏毀釈は決して無意味ではなく、雨が降つて地が固まると云う見地よりすれば、やがて新仏教を建設する素地を与えたと云う事が出来よう。あまりに破壊に急であつたとは云え、教界革新の意味をもたらした点から云えば、当然通過せねばならぬ過程であつたのである。

註

① 道家的な自然の道を付け、神祖の定められた道と云い、徂徠の古学派的考えに接近

② 神道玄妙論 玉だすき 巻十

③ 幕末の尊王攘夷運動の思想的背景となつたものに、国学と共に儒教に於ける水戸学や頼山陽の「日本外史」等に代表される史論の流行がある。

④ 地方の農村に於ける国学の有り方に就いては、島崎藤村の「夜明け前」にあらわれている。

⑤ 宝基本記の「神垂は祈禱を以て先となし、冥加は正直を以て本となす」の文をひいて垂加神道と称した。

⑥ 僧文雄は「非出定後語」を以て、また潮音は「摺裂邪網論」二巻を以て、「出定後語」を批難し、南溪は「角毛偶語」五巻を以て「草芽危言」を攻撃している。

⑦ 「出定後語」の著述は、一七四四年（延享元年）大乘非仏説論を主張

⑧ 寺子屋教育が普及したのは寛政の頃からで、寺子屋の数は全国で一萬五千あつたと伝える（日本教育史資料）「甲賀郡志」上巻 第十編教育には寺子屋の数百三箇所とある。

高橋俊乗著「日本教育史」 石川謙編「往來物落穂集」等参照

⑨ 僧侶の墮落は徳川時代に急にはじまつた事ではなく、すでに室町時代にその端を発している。

辻善之助著「日本仏教史の研究統編」五四六頁 僧侶の島原遊女通い、若衆歌舞伎への耽溺など、

江戸文学の題材となつた例も多い。

⑪ 「甲賀郡志」上巻 第五編戸口 二六五頁？

二六九頁